へ14 2690 13
へ14 2690 14
へ14 2690 15

へ14
2690
13

へ14
2690
13

東京都立中央図書館蔵

是とても酢器店に類たれど其中店のおあぶりより我が嘸舌ぶ
まぐるしきこのとわのひ机を店構へ加記列べるお傳が傳でん
ぐん第五に奥ゝそへ讀沢山にそめはゝ、お兒様方のお慰
さみ赤本めど紀の重様の粗漏も書肆の御用い急御用豊島
社飛脚の支度ぶで綱島乃催促ゑ飛だり跳ゑ忙しいのハ
初心の記者ふハ有ぐられど不馴る業少ゑも廻らび筆もま
つらびコマ足ハしたがヒヒぐ長く活計の爰ぶ一ツのシンバウと
曲りなりにる打つもあかるる系引まへうこと、ゑ

明治十二年三月中旬

岡本起泉誌

東京都立中央図書館蔵

再出
鈴木濱次郎
高橋於傳

新富町三丁目住
宗倉佐七

○お侍いさまふび賀武雄ふあ匹と ▼かつてお侍さんの僕い人逃ひそして
安八時とあり」ふ先方いなに晴ち ちくさお茶ちふ何も逃る虫及びきんぐ
事やあり兄逃足だ〜て逃 いろ山地へか出で〜ことあるべてきると
ゆくとやぶ逐うけ潔さふ強の 幸ひふお侍い武雄と傳への水京
蓋のふ多強ふて逐つめ羽 左へ引入れて仕こ外のいひ〜ふ
織の紋とちろう捕へモシと と傳り彼水茶い何ちろう求め
ちろに鳥がきれ和ども ちと尋ねると武雄い数ち紀
ひね苦しき胸と極みぶく まいとんぐもふい事あの茶
何も逃る虫及びません寸 こを内山氏が彼こにろて屋さ
一云おぶ中ふいるがあり 僕い何も逃る虫及び
手すと優しくいそ生き ふい何等の保細ち内山氏い妻の
武雄も世ひ元結合と愛 お茶と殺と模演の宅い引払い
オ、お茶い模演でお目に ▼しの事ちるが生涯一度の

次へ

うきよ絵
踊り野
つぎ
あらびき
僕いまゝらぬ
事あるふこせ法あるこ
安しく安て走
まあること走
あらうんと
まるとあ俤
はいりとあ茶のあはまで
あるが生あ前沼田の原田と呼
家ゆあ出であくらうと問ふて
ず
生
知
ぬ
こ
と
事覚時

武雄ハギョッと色おび出せばそ
澎々四ツ〻五ツ数枚の
姫
ふ
俤と
いふぶあり」が
まう あふぬう
何ゆもせ
蔵 ゆ
おめ べ あふ ぬ と い ん 拵て
逃出せを お俤ハ又も
逐ゆて羽織の袖と
と せ ゝ と 懐中ふ隠し
拵る 結カ ゝ ぬき
武雄ゆ身体を
ゆ ゆ る と ひ と し く 羽織
の 袖
ハ
イ リ く
と ち ゆ 紀
ま る
織 を ふ お ん へ ゆ ゝ ゝ
風へふ側を アレとひきる
当由 袖を 捕へ を 光延
る 高 ゆ ま へ 武雄ゆ

つき
ぢーと切つら
お侍の新
加茂武雄
如何
ませ
ーや
姑息する侍へ不
休む一人の男が危
きの手で斬り
お侍の新
お侍
ハ
きん
ぢの
ぢの
ぢの
ぢの
ぢの

傷の多者と名や
形と流て要
お侍
ハ
詰め
てなが
つた雑々
又上ぶ
乳
号名
横浜に
あらるさうあ義が濡り
不任長る酒家藤次郎
といふ者あて別れ愛ふ
せーにあふれど
知れず
水茶やの
きも弱り又ぶ
かるかもまく
吸ふの
お侍の新
傷ハ浅
奥へる傷ハ浅
出血する

[いき] 義氏殿に
自分の宿所を
尋ぬ出京の
折々い尋ね
られしと云の事
をのとして立つめと
止宿へ帰つく
市さ市を呼
うせ武蔵の守
を使り膏薬を
買求めて傷所
の手当をして
鞍町の家作の図

↑さこー
ろしく
みへ
挟
に

※何の四沙法も
あのの上をうらば
又出京府ふる
事とあられ
ふ上那
に別り
みく
外へ
宿を
おうへ
ふる
事い
てえ
ぬ



図[illegible]一日も早く引移らんとく
万事の用捨とき市さ市
ふ鞍町の店を老ましへせ
共ふ鞍町へ引移らんとせーと
宿の者ども付き女の上形
伊云事接ハ年来の江戸奥方れば
とそんを面ーく女中ハ一人を
途中ら庵ーて茶屋へ
ちこのでいたば上那
中ーさ女ればれば恐ぬが歩て
渡ぬ事ちるに伊云の事ハ
ど着い
家内と
天用ふいて
いれど上
那ぬ
ふすりこの
ちつも
ふ事へお
ふると上に
ふ手紙ぬ事
ふ今云に限つて※
やしませんと
義氏殿の
者ぬ吳ぬ
ふ伊ふ面恐ー
いつまで行く
上く出京する
事ぬ伊云事へ義
狸ぶて
毛皇
云う

お許し

七 次へ

つぎ
市左衛
上沢
市へ
出迷

上沢
西の小沢
荷物と面
逃
粉
町
三丁
沢へ

市兵衛が
汗へ出る時初め
て用意と和尚して
髪を九郎右衛門久
道所へ市兵衛が女房うと
吹雪していんめと通り藤屋の
店を開きて後ろ高ひとと
ろうが二人とも仕事を私業
といふ様ふ家けり
癖出れば
用捨抜めて
おつぎ用を
喰迎ふるふ市兵衛が

※あらを見る
仕業とあり
ぐ一先在更
立帰り
祝儀達へ

先の老ふ来をしめ生後も
頻つまふ鬼ふまを出し愛賢
せしが爭ふ義の
家を始ん
昆きを損
のこおつぐ
きるの
あす事義
同となり一時の
業曙ふ網へる長鉄
網鉄まで変ふ情合ふ
いろう三月四月いなく
うども備紙等ふ要むにつけ

▲今ハあ得もん細く彩
ていろまをかしを
居ても次第ふ困究☒

☒なるのこあれば
外ふ工まとめぐ巳て互ひ
に示をせんものとあふ折し
ものを戸籍の網べが厳し

籍引
半
次
に
籍
と

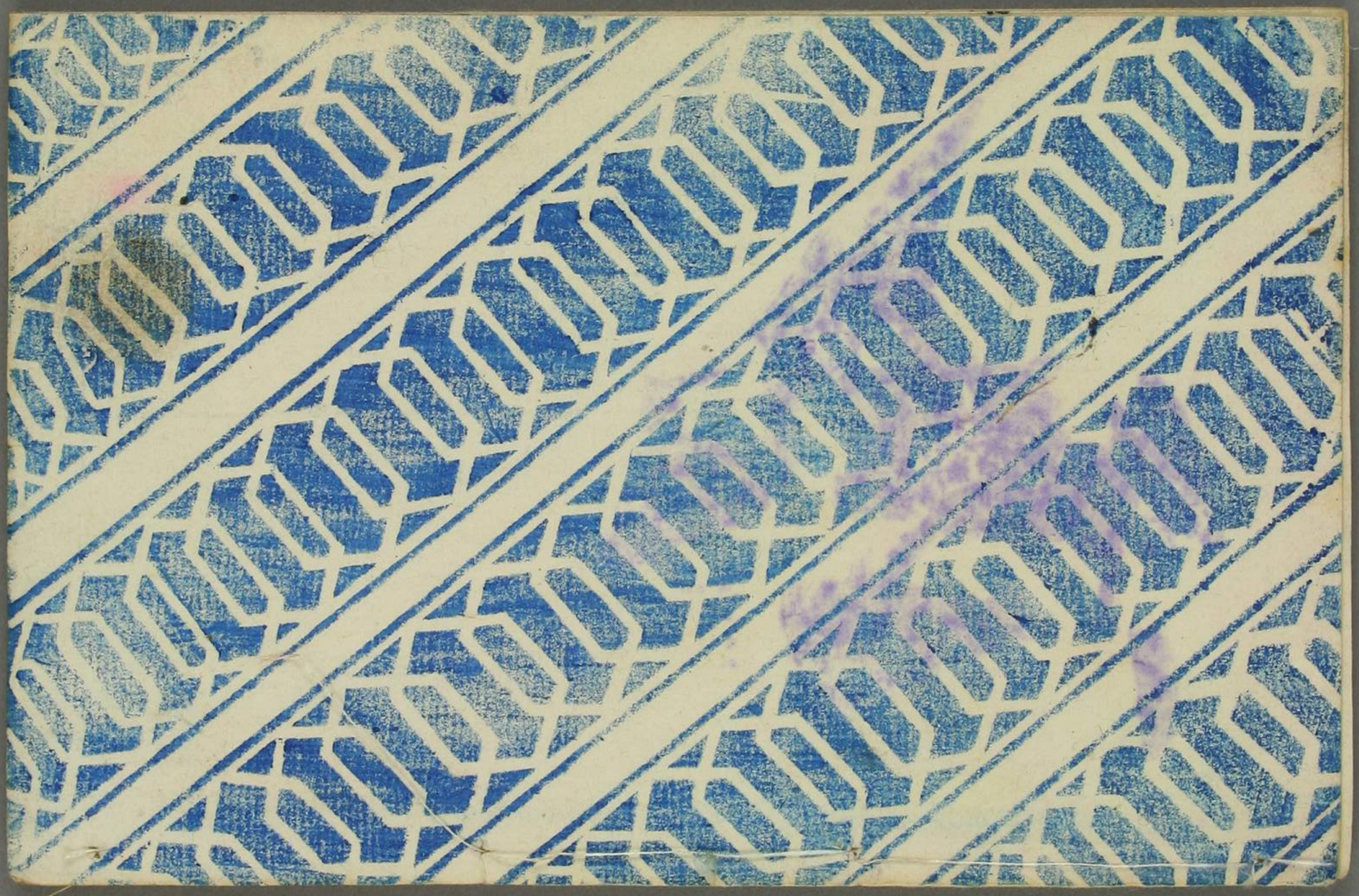
つぎ　そんど外は
そこのとあると
先ごろ國へ
送りたる
る紙が
おしゐ
いつぶ
紙合
あれど
文い
何とう
云ふまき
かさん
と又

又ムと定め市兵衛に
委細を告げて子の
ほど成ろうえさを
横町の世代を
たんでさしの
路用をたくさん
二人で来来を
出立ちて
上野の国利根郡
下牧むらへと
越むきける


東京區分繪圖全　鹿兒島紀事 六冊 切
命之養生善惡鏡全　島田郎梅雨日記 五編 大尾
珍笑 ㊐ 々都〻一 丹五扁 出板　彩色入小本數品
御所櫻梅松錄 十五編　紙優忠臣藏折本
大功記銘々傳 四冊　新板双六類品々

東京下谷區七軍丁廿七番地
繪師人 岡本勘造
東京區五軍町十二番地
出版人 鯛島龜吉

金龍地本繪 問屋



へ14
2690
14

特
へ14
2690
14

宮城県文庫



○和尚お伽ぶりみて夢の白雪紀安吾と潔々きさぎ ◎老眼のもつまぶ故郷の孫いろいろねど変り〜 汗ふきつく麻苧の日の照 守る紀お伽放屁いと 寒雨を村人ふるふ和尚撲ホ ちはしたる面舎嵩の英 ぞろり和尚ろ紀ヤア

と途中みて日の西山ホ入ると 盛田紀親鉄ぐう父 叶宮ハお伽ぶやあいろコレサ

猶命を命を清べホ煙ぐ 勤右衛門ぶ陸ぐ助の実父 代助どん呼ぶいぶ彩と

下牧村に入れのかみてん 代助と風とうけるる接先 やふつふぶ彩どろろのナ正

養ふ家へ帰らんとあうひハ で何ら待らホ家ぞ戻つく来さ 生のお伽ぶ戻つく来さ

あくぶ今更ホ九右衛門ま 爺さん一寸と音の声ホ お供の流も叶地へ来ませ

婦ホ絶るべき云茶ふ子 勤右衛門俗ろこのひつちん イヤモウ案じそあくぶ陸でい

ぶびお案とく実家へ 久ぶび鄙ホハ用にたろ あいマアく早ろ上るがよいと

ちぐろて狭をせんと父 孤出陸夜つま惰析さ旅 急立らとお伽い潔く麻意

勤右衛門ぶ門辺ある ◎ 時ろ入周れいい剥れど ◎ 苧麻の梟絃の紐と 次へ

胸のあたりを
あなぎ
親文と代助ふ
長々
実い
雑談
何
ふ猿ふ
悪い耳ハ聞せまいと
ん
ん
ん

いざき　死ぬ者と知こるく波こ助と
綾へ出たのぐいまつくとてはあい
いられぬ程しんぐいは方の虎情
と恨んでどざらうと
めあと我の
はは胸ぐ

我らい兼こうてあらぬらいと
ま拭と鼻に押あてたこつまぐ
月とぐぐくく代ゆもあい出て
鼻ぢ

動力業こ
そのいふ
いられる人の
はるる業病
人と
ひるん
放すぐ考る
の人情
に
あれるで
看ぐし
て下さる

翁る猿
じゃまを枝苛ふ
する

コレお侍親切らーく
波こ奴どんを体て出このは
久ーぶりで戻つて来こ娘
の顔とみるい嬉しいが一杯に
出こ波こ奴どんを横溝の出に

あのて来こ
のうと
代ゆどんの狗
の肉ぐ喰せられて
で宣うてふき
嬉しいと面つく
らふと出た侍い写
生て来こ初ハ出郷

つゞき

とらいとるのゝ私ゆへ少しも合点のゝ長波ゝ助さんが死ゝたゝ今岡のゞ初めてゝ私ゞ何の落語をする位ゝ初めゝ湯治ゝ

ゝ市さんの家世

ゝ代助

ゝ市さん

ゝ代助

ゝ代助

ゝ代助

[illegible]

立石まで送つてやらうと仰しやるので在中も乗つて[illegible]て敷るつもりでしも笑への事で振[illegible]と云つて見たら[illegible]の実は長々波と助さんの西側とゆくこの男はさん東へ入るやすと和泉屋しの[illegible]猪で不審にあれば[illegible]代参進ゝ出れば[illegible]方を振まして[illegible]ふと動おあつのどがいい者のいとア同て下されば[illegible]月の初めこゝ横浜ゝ面いと郵便の[illegible]

紙しの旅ふ病人を抱へて難渋困るであらう[illegible]と笑ふゝ相談して二人と東京へ出向たが只狼で[illegible]で東京の[illegible]所とおろりでい判然せぬ由を横浜へ行て写[illegible]ゝ[illegible]月の末ふ仮村しゝ悔しさが胸ふ来るので勘右衛どんがあの揺ふ乗しに附して[illegible]方へ小云といわれるのぎゝが如しがいかう遠ふてあるのに[illegible]ゝ[illegible]りあがい[illegible]名前をとゝてゐる

[illegible]

紙しの旅ふ病人を抱へて難渋困るであらう[illegible]と笑ふゝ相談して二人と東京へ出向たが只狼で[illegible]で東京の[illegible]所とおろりでい判然せぬ由を横浜へ行て写[illegible]ゝ[illegible]月の末ふ仮村しゝ悔しさが胸ふ来るので勘右衛どんがあの揺ふ乗しに附して[illegible]方へ小云といわれるのぎゝが如しがいかう遠ふてあるのに[illegible]ゝ[illegible]りあがい[illegible]名前をとゝてゐる

つゞき 寝こきろ実い
和も困り
きーたと
洞子と会すと
勘右衛門も
騒ら
ぞ吉左と
〇

何の保細
いまへ
ゝ

玉軍

きぐ村へ
戻らうの
繰りは
てあいそ
一寸然谷
の裁判
変わって
来ませう
くままぐ
い善吉家へ
然ってあいそ
ぬめてあいて生羽主和
市右衛門のゝ金を盗匿

〇あつらと伺方が生実う証 ▲逃亡
拙のあけそび強て拳あ強る 届い
あか伝半信半疑の代助がノウ 懐済ふる
勘右衛門ぐれ二人が家出い上げ法ふ とふをあ伝の行
うてある夜然つて生ぬ生ぬ 消しは換と
うろまい九右衛門ぐれるも和扶しと ると郷つて面例ざ波の助
右伝さんの庚つこと と声長さんへ さんの兄ぬあい紙い拳ぬい
届けぞびあるまい郷ぐふ打捨て かりぐうとあしぐぶ紙の
金ご波の外の紀ごと も一郷ふ届ると▲ 家出い自弥さんもれば☒

とい寺の寿ありとて
あ伝い勘右衛門ぐれ
三四ぞり
のふ者
をれど
ひ
とり
市右
家と
保ふふ
て家うふ
村と立出
しい

つゞき

つぎ　ふしとが唱遊び親父と代助が横濱
まで繁き出向て実原〜実事を虎と五郎
右衛門で丹く移ら
せ〜ぶ親ぶ
接子の
やうい
ゆいまといいひど
市ちを腹しく油断をなさぬ
親父が振舞ゆてい所ひふとを
伝用されぬい必定なれば長居い
却つてあーたらんとあべ自所
ホとをを無谷さして急ぎ
しが此作ホとい末二人が路所ま

図　五郎ゆて妻ゆるとの
とられど出てひんと
近所の
きとをぐう
兼て慈
想ませ
るあれば

◐　旅宿へ泊りこま男が二所に
みそい仕どがまづいと市ちを
と外の社宮へ長ぐせ重
人と教
ぜ演沢
命を
逃ひに



達ふ事ゆやあらんと必家とをぐ長繁谷在
大麻生村へ長ゆて家階がふつと出せしへ
十八才の周ぐ村の名井とこのる豪家へまを
ま〜折若長能とらが淡ぐ弟ハ廿二才まく煩りみ
ゆびけとを流
長ぐ生ぐ長ぐい外ま
ちまがあり旅
甲々家と逃
出〜再び
音信ハ
せわど長や
と逝所で
接子ゼ探りしホ今ハ淡ぐ弟が

図

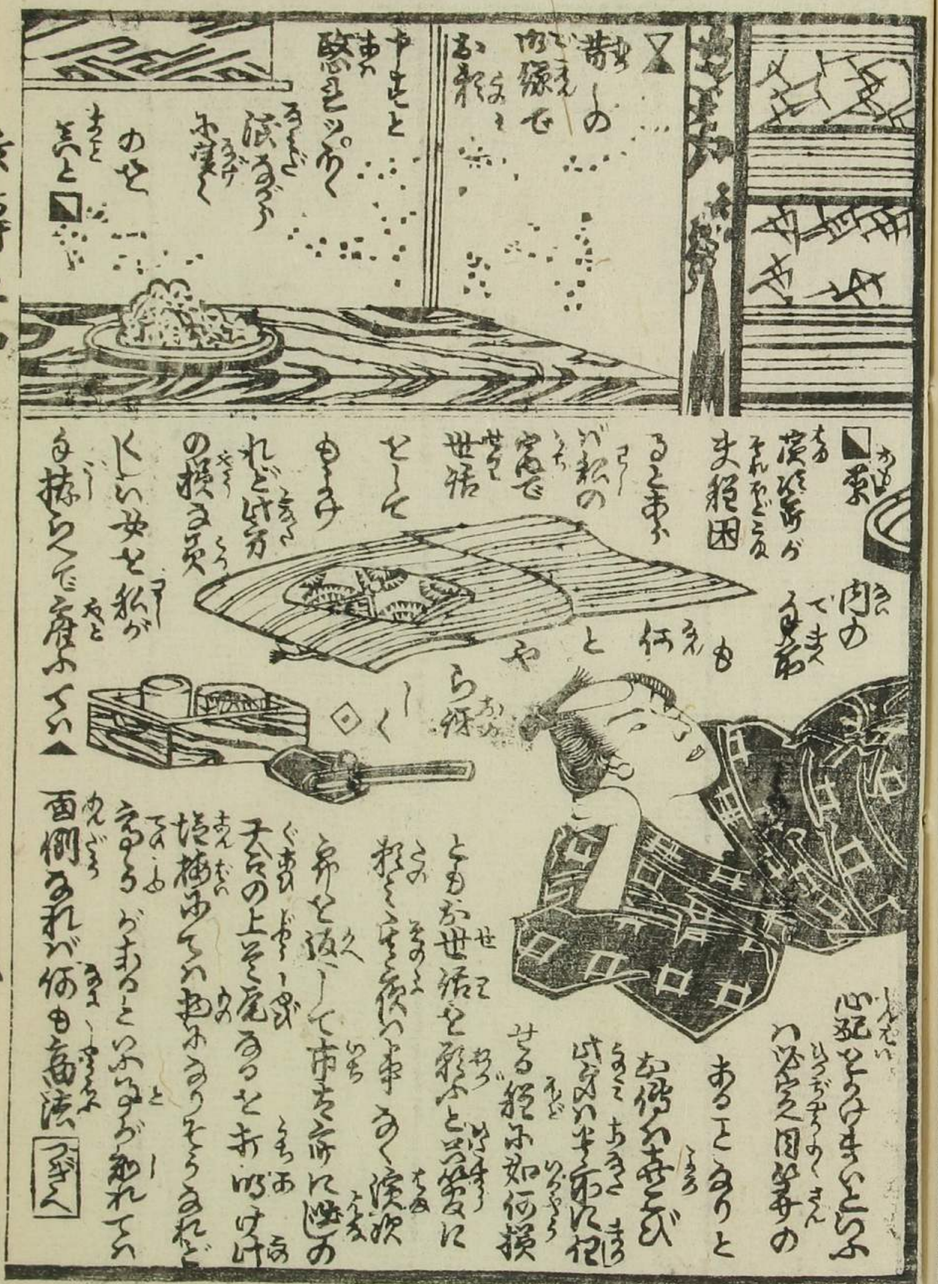
仔細
やあ
らんと
◐

が旅書人来ホ
次
お信
一人
ハ兵
年
演次

つぎ　それにあはいの藤の後枝いと雅ふ
月の上巡りて枝涙ふて　まふ別也今とあつて雅
涙とさそれば伽れいまうとまさとそひとしされど
此近辺に紅色の
みなもべ

◇ちらるのもつら
れば何美人
えはを
桜しと
あぐん先
づ美逸
いあに
遅蛍
と
あれ
よそのの
さい私が百獨
りもて行方に





◇栗
ある演芸場が
それどころ
大狂困
ると
い私の
家で
世話
とて
もみ
れど
の接吻
くい女と私が
を拝らくで
廃ふ

◇
ら
く
と
も
何
内の
ま
栗

◇
昔しの
内孫も
お新

中也と
東
感ピッポ
涙ぐ
ふ美く
の也
ま
ま

心弘とうのまいとらふ
いはなの用等毋の
あることありと
お伽かまとび
ちまと
ばかいまと
ばかいまと
ばかい

つくき
偽
小松屋

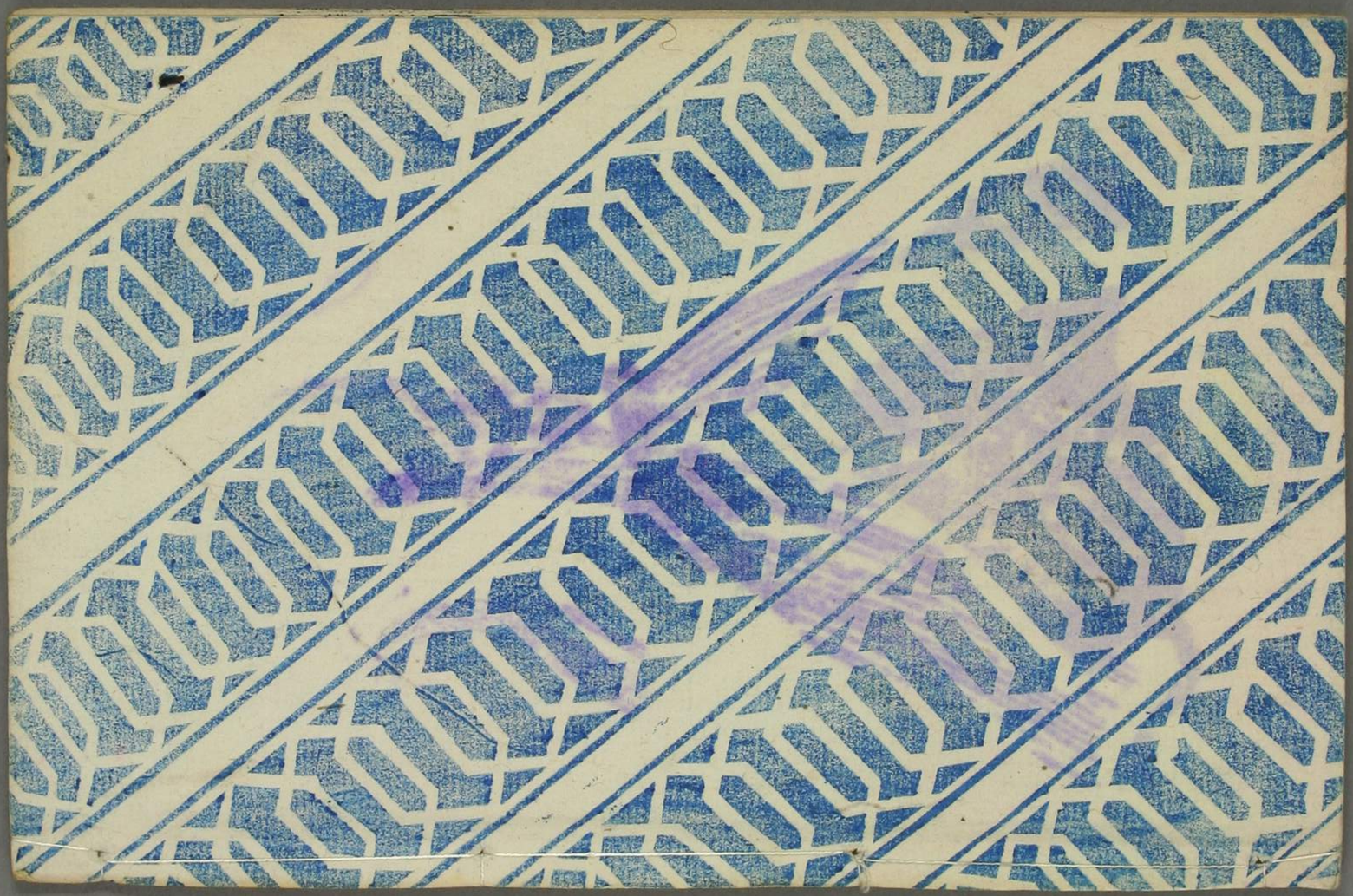
熊谷寺
市

[illegible]

▲市右衛門と云ふ者[illegible]

[illegible]

[illegible]



へ14
2690
15

へ14
2690
15

# 芳川園

## 七夕飾

### 有種画

吉原七夕の図

毒婦の小伝

東京毒婦

五編中の下巻

高鮮堂 毒梓

慶應大学

○扨て市左衛門は早く庵主の名を聞へ呼び寄せて怒鳴る山路と称する武門家所とゝろなる不小立流を家と借りうけ十分に支度して待ゐたるに渡沢弟が伯の二人い義扨と一所ふ別居暮て示し合せたるとなれば伯い渡沢弟と我まゝりとそ

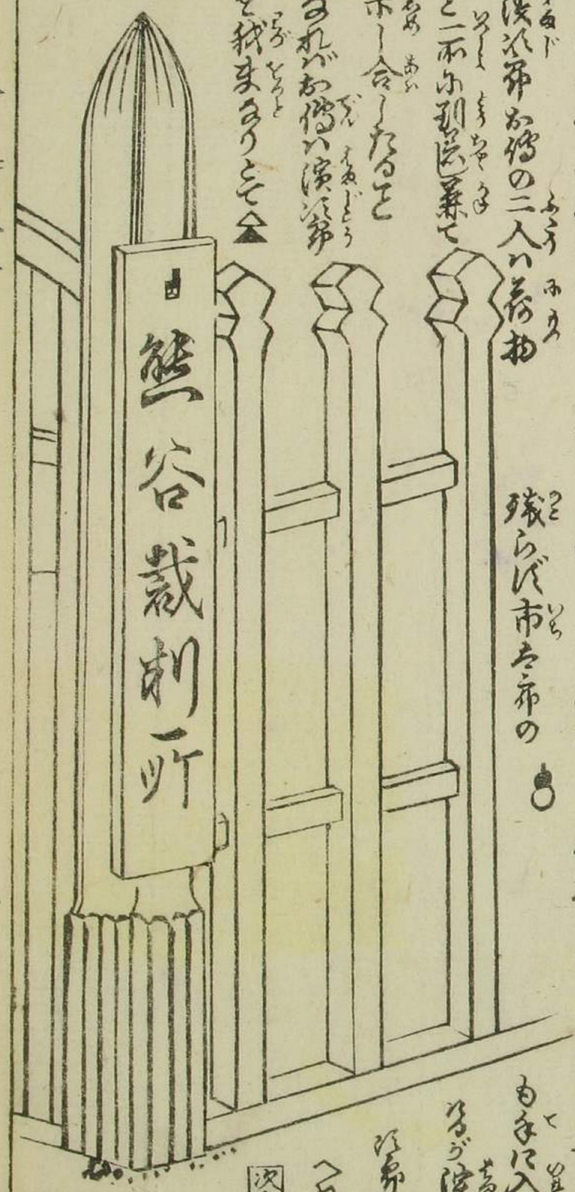
○扨て市左衛門引合し虚空蔵の前迄送り方々の周旋を打ゆ出れば市左衛門涙き子を霧ゝ故渡へ仕流し帰りと元屋ふも搗いどまゝへ裏掛きなる故彩ゆく人ありと伝聞して義扨と殘らば市左衛門の

○店へ引迎せ方々の義扨の出来り支度の今を

もとに入







代金ごう
反葉らあとそ
潮さ八百田付り
と後比のこれ
ど俤りとまう
れば醤油文
方と軽こ者き
自分い日々
法方とえお新小
お俗と俳ひ者りと
極めて上日と送り
●忠配とる体と お俗へ悲と手の毒ゑる新と して代方へ
新んであけが主ろうびは泳小成べられば紙の雨と四しく
新めて私共ハ一先東京へ戻るべしと勧めるに涙ぬ事も
同志一伝でも市ち帝へ報
こあきお俗とられて東京へ
☒在而
小妻子も
帰ると
後お俗
とび東京
小田ひ
ゆえ
お相
後に
お俗も
かゆ俗が寄ら小市ち帝と
ふ帝ーこあるものえこう▲
▲新ばば呂
金子の
反葉め方と
俗足せーが
●
迷も
急小
繁の
ふ
と
市ち帝
兼て懇意
にしこる銀町ニ丁目の
倉川重右とのあハ
市ち帝と因縁
の者なれば表
小店受と報
ニ丁目町九丁
目小山三郎
三郎家
と俗
ふ

つゞき 名古屋つき濱へ帝い長く安うに ◆品名古屋うち何とう問法が ◐爰へ囲み
せーとて一先生布へ立帝り」絵へ兼て ありそうなものとこ俳優を紙 あくま数も多
云金せ言るゆ者れば市を帝い名古 と実出せを御が中途で取持 くかるのを有
屋ゆて七八百四の金を面葉めて 名古屋うち面きしゆて 金とても俄ふ
土象ー 焼町八丁目十二番地の きを休ませ知れ二月 ◐
流い方ゆ止宿ーて四々の按ふ

かゝが宅へ立入り
俳優うた代
茶ーとあり濱流う
半象世あり八面七合
ぜ
ゆ
与幻て遠
らゐ頼
毛ふ
俳
と
◐
ゆに縛り
どてて金
を角せふ
主ねば濱
次も今い蔵
慈せーが来
ご市を伝用
る故生内ゆ
勢自在くで
市うと按ふを
きくに主象へ為る金毎に
濱代帝へ失笛の
ゆとゆも知べ
◐按はて飛ーゞ
載らづゞ俳ゆねゞう面
見る金るもゆ
次へ

つゞき

うろわべ弥々困りゐる哲ゞ来こう
庄屋ホ受度さんと光時しと宅の地券
と持出しあ情ホ事の伝細と吐しと
ゆそ金を借度とのるホ情ハ金を
と拵しと金と蔵らひ代方へ

巻上ん
とて
内々
由と市
を弟と

二十枚空
金百二十
円程のあと
五色之を
引表にて
千円ばかり
の金を借
うけこと
占と

次へ

つゞき

[illegible]べ平吉は承知して金子を受取
[illegible]の奥方苦面相の上へ出て通り用
達べ〜この夕方れば早々まさのゝ後とされよと
急がれてお借へ申忍世が兵衛金子を入用
[illegible]の奥方の御手紙を受け取り
不金二百四拾七両借被〜と[illegible]
[illegible]一切の方とみて金を取と一百涙に暮が
在所へ帰り奥方のゝ後
とうすビと仮義[illegible]

□金二百四を御借と
お借へ涙して証書を[illegible]り
独らべ四拾[illegible]四一両に
出立せんと約して立返しが
お借へ決き子ゝの[illegible]
べ二百四の図

図 金の出来と祝

ひ[illegible]
[illegible]夜へ法
て涙に命に
[illegible]を

[illegible]
痛
[illegible]
[illegible]
臥
せ

次へ

つゞき

密夫人を孔んで市右衛を呼ぶ

淡次の熟脂と伺ひて傳兵衛と密と
しの恐れ出で意和の出刃庖丁と掠り
取て意和を待て主の市右衛と
振き近づけ耳元に
何やらん囁けば
市右衛いろ〳〵出刃
庖丁を受取て手拭を三尺のるふ
あつと挟て夫婦の秘四人是生へと行ん
とするとお俗に引とめ意が強くて
まへと二十四やどの礼とを返〳〵するに
市右衛に折り〳〵又頂戴ありてと
脂粉のかゝ〳〵へ押とゞ沈る達者ぶりトいひ

新吉と藤兵衛へ渡り
久々と涙に暮れ主脂
の俗に
七蒲
密の
之に
起きりて寄挟
ふお俗に暮やと
ひしと命の恩
で何とどんと
指を丈オヤ〳〵お用
ざあぐしと今一寸と
いはせの

お俗の肩へ手をかけて出と
引き
然て
早く
あり夏の間
の涙に弟が服をさ返これサ
あとれ泣くとの表れお俗に
数るとき小数あとサの市さん
早くお出と押る市右衛
是言を吹ぶ生ぎ〳〵
お俗に用へ入る
体ゆて百兵と
あゝさう何なに

涙
引き
然て
早く
あり
の涙に弟が服をさ返これサ
あとれ泣くとの表れお俗に
数るとき小数あとサの市さん
早くお出と押る市右衛
是言を吹ぶ生ぎ〳〵
お俗に用へ入る
体ゆて百兵と
あゝさう何なに
してあることのられて
お俗に返答ぶ困りい
表ぐ手紙を紙面
の呂兵衛に
本と入に何サ

つぎ　さんざんの方向も何もを様子甚敗らくいなあり及べ
あの人たちは那様奴がぞうるあのつサ店をとて
黄いてあるもの人が金をかりあるとあんばいを油断も
たるのこる　あらまくこの子金の事サ
金をの方の始合もあり
明日一番は引てもあ来年
や何うをたるの
で一日や二日いる
がつぶるるうう雅
ろ来人好て来るるを
と同分は出向て引て一度
るるぎ　こ来花ふを
ばつて。

市

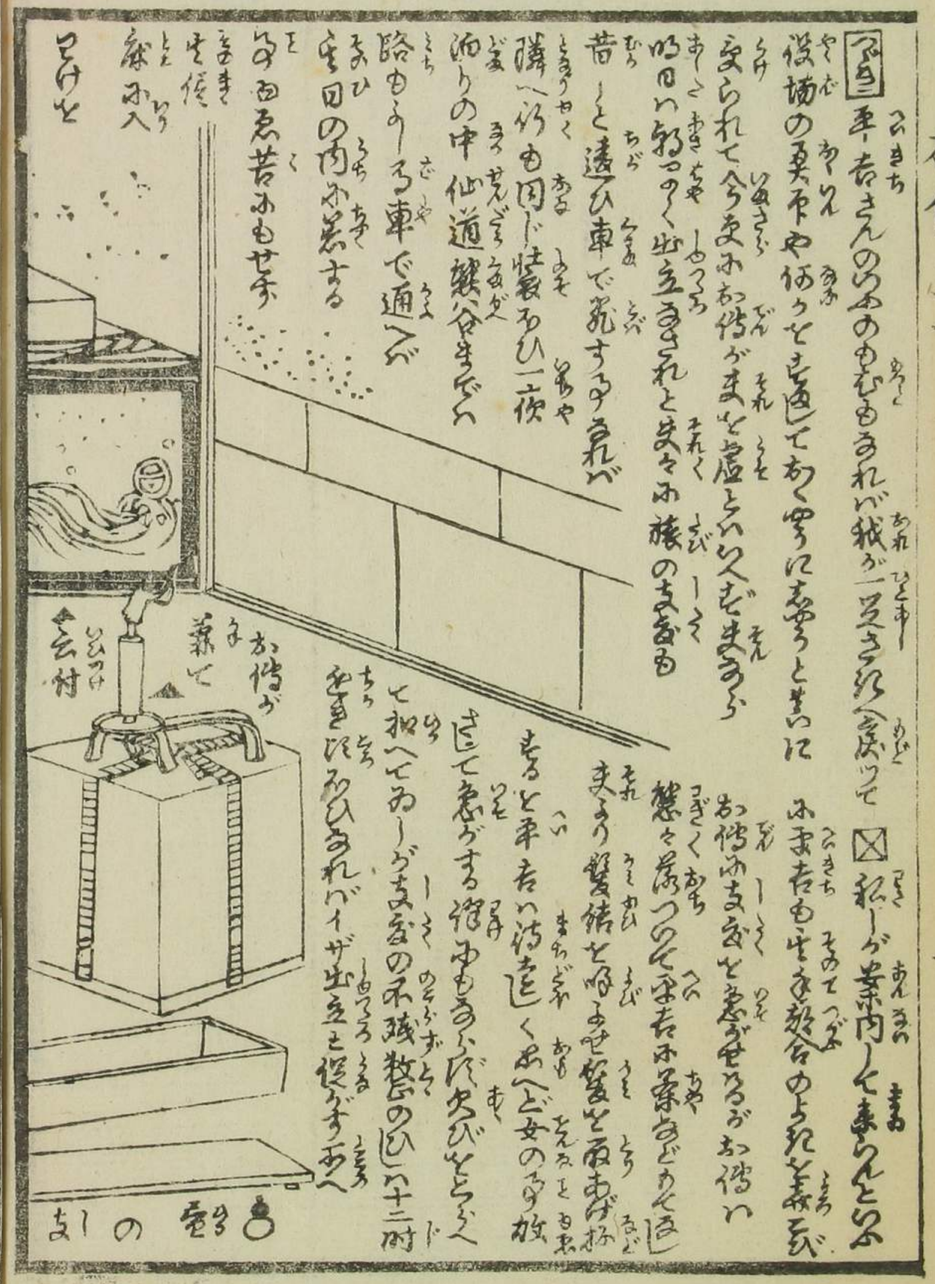
▼引うに来んだうね一寸あ上うと
云ぐ遅くもあり来ぐらふ
う上り裏で出ーを

あくのぐふ雲
人ぐるを様甚助しや
きへとあつてあくにと浮ふ弟
の膝はあられて云移らに
毒婦の云に
ぐ金と廣す様
ろ来人好て来るるを
と同分は出向て引て一度
るるぎ　こ来花ふを
ばつて。

▼金をたてあつてこれと懲さ▼

ず情まで
引ぎうえ
ぐるとと
付き花号
ぢとぶ次へ

此画様の解い本
文にあれども
第六編みて自
づから判るとこ
ろあるべ


平吉さんのいふのもむもうれい我が一足さき行へ戻つて
私しが業内しとまらんとの
後協の夏市や仏うとも出て行く男に逢うと言いに
ふま吉も生を教合のよう死を義氏
交られて今夏ふ作が来を虚とい久ぢ生
明日い新つつく出立きされと夏さふ旅の支度
お作ふ支度と考ぜるがお作い
昔〜と遠ひ車で死するゆえれば
蟹を屋つつの七平吉ふ業をどうそ
隣へ仏も国じ住裏るひ一夜
酒りの中仙道蟹谷生ぢい
路もうる車で通べ
生田の内ふ考する
ゆふ西吉昔ふもせず
きき生徒
糸ふ入
ひけと
お作が
糸て
云付
蟹の

ねべ演
決ふい
相立彩
蟹谷生ぢの車を賞
て考ぎ出立ちる
後人金門手吉い線
仕立て入まり
あき酒者を
持
ゆんと考ふ強
られま吉る俗
俗きく生石に
風を義つつ
お作ふ妙を
そしつ一杯
二杯とあむ酒
にそしを合せる
お作が愛敬こぶ
出立せ一中を作り生石ハ
酒ふも

図 気が付ずにとれて仇討もそろそろ今迄参ぢ出まと意見に接子ホ仇討

とそろそろお借い図

図 名前ゆえ手西舎

終ーしたの性

ひい兼で知ー

なるまうづ

今と成てハ演

弟仕掛ゆう

ゆを果ーねば

如何ゆも俺て

図 藩家の老婆ホ者ひ

をもろ入力車ホ乗ると合乗ーて乗乗と

出立せーハ明治八年四月廿四日の午後二時

まひと笑くろ○郷従往本演ル弟い

演入のタハ沙ろふゆ甘の地券ヒ方ハ

度をゆい者情の三百円と逃き

ねべうぶねど笑者りて今の歌通日

出来ねば如何ゆ上て仇討の新

俺と

図 逃

と者



今藩のうめとて容ふホ地券ヒ物出ー

お偽が世張ゆて金ヒ借ゆると思い

ウ巳ゴ戸出の奥ホ上ゆろ多紀合ヒて

ゆうと一人大麻生村ホ立ゆ山ゆて祝

鼓の老ハ村ヒ出めて演ル弟ガ

地券ヒ物出ゆると上家

知ー鬼ホ前ゆ出て云

ビ偽入ゆると上ヒ拒ゆ祝

鼓の内ホて残ら地券ヒ祝ゆうと云ホ

演ル家ハ悪ー今ホ平者ガ

来ら仇と云ゆ上ヒ

業ホハゆ生変然谷者の布絶田と

いゆ家屋ゆう金川平者と

図



惑の鉢の

ホ者

ホ者

ホ者

心ヒ

邸

ホ及ば

ヒ

ヒ

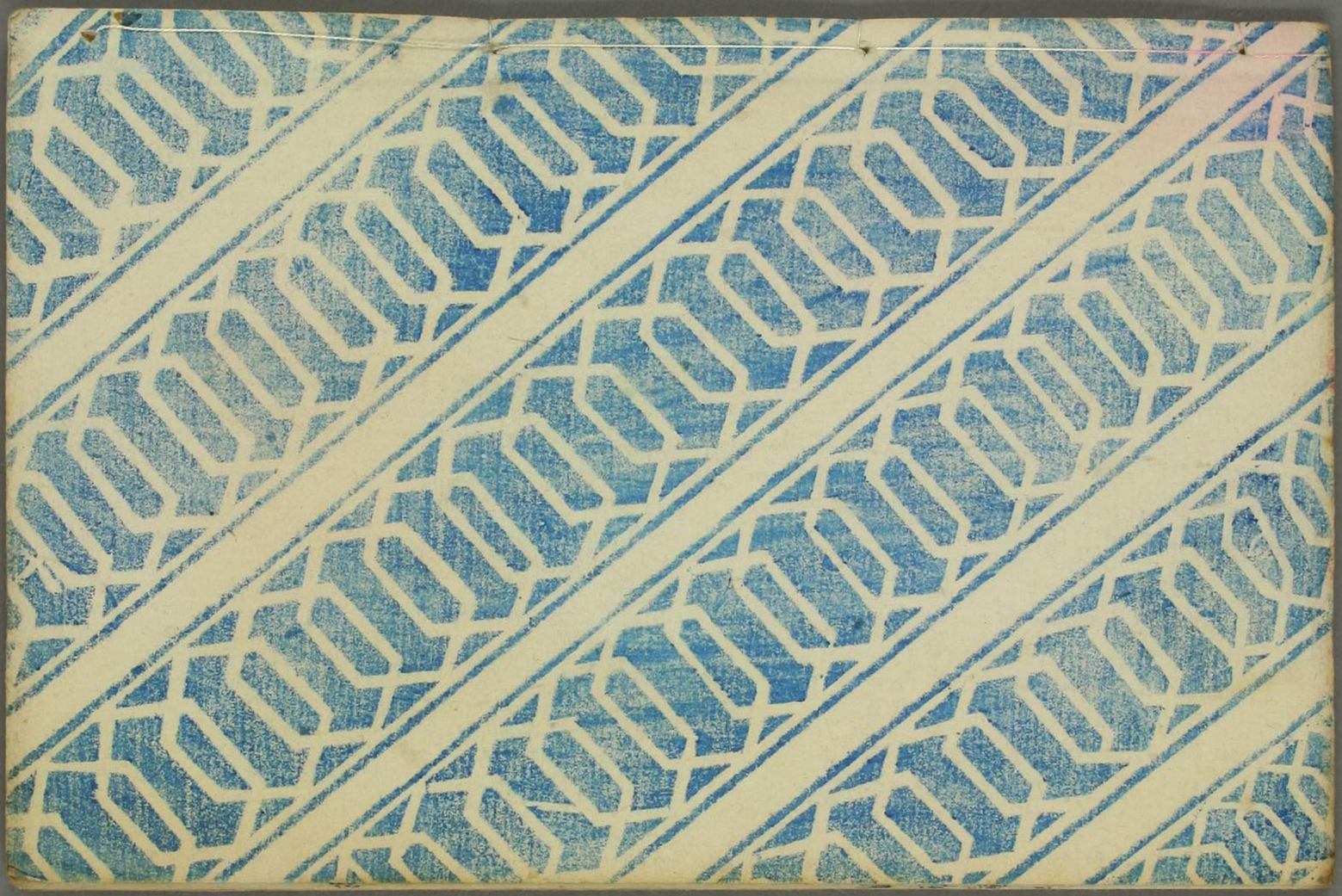
ヒ

次へ

つぎ　姫刀を内懐中ふくし若ちきぎ
市施田へ赴むき先刻ひとゝゝ世客人が
あい死旨を云人を案内にて来て来中安へ
通りてゝ是ゝ見へ如りゝ金川ゝ吉へ
あらばしてあい
みゝ死
お伽ぶ
一人牌火
の下でれ死あそて
あるきゝ石ゝ淺ゝ弟へ
一度へ数ゝ百ゝ一度へ来ゝび
ものゝもへゝ花鉢と帯へへ
発ゝゝもつぎりゝゝて

芳川俊雄閲　櫻齋房種恵
岡本勘造繪
明治十二年三月四日御届

東京區分繪圖全　一　鹿兒島紀事　六冊　切
命之養生慈鏡全　一　島田郎梅雨日記　五編　大尾
珍　文　寿々部〻一　丹　五編　板　彩色入小本數品
御所櫻梅松錄　十五編　忱優忠臣藏折本
大功記銘々傳四冊　新板双面額品々
地本錦繪問屋
龜
製本所　東京區壱番丁廿七番地
編輯人　岡本勘造
発兌人　東京區反町十二番地
出版人　綱島亀吉



其名も高橋

毒婦の小傳

# 東京奇聞 五編

芳川俊雄閲

岡本勘造撰

櫻齋房種画

島鮮堂

壽梓

へ14
2690
13-15